

新潟支部

新潟県本部道場

支部長 古川 章

〒950-2162

新潟県新潟市西区五十嵐中島 5-1-1

TEL 025-201-8318

H P <http://shinkyokushinkai.life.coocan.jp/>

道場訪問

Text&Photos / 神田 勲

part. 9 DX

（ 支部設立から 10 年。豪雪地帯の新潟で 歴史・文化・伝統の発信基地を目指す道場 ）

今回の道場訪問DXは支部設立から今年で 10 年を迎える新潟支部・新潟県本部道場を紹介します。古川章支部長は空手のみならず、茶道や水墨画といった日本の伝統芸能にも精通する文武両道の体現者。日本の歴史と伝統文化を後世に伝える発信基地を目指す道場です。

①大雪にもかかわらず 20 名もの道場生が集まった。②気持ちも新たに新年の稽古が始まる。③基本稽古は正拳中段突きから。④黒帯が率先して気合いをかけていく。⑤古川支部長からは年頭の訓辞



4



5



1



3



2

JR越後線の「内野西が丘駅」から徒歩で10分ほど、県道沿いに新極真会新潟支部・新潟県本部道場はある。

道場はマットのスペースが広く、ガラス張りので外から中の様子も見やすい。以前はコンビニエンスストアだったという建物だけに、道場だけでなく道場の前には駐車スペースも広い。車で通う道場生が多い地方都市の常設道場としては理想的な立地条件だ。2010年10月10日に開設された新潟県本部道場は現在、新潟支部の活動の中心となっている。

古川章支部長は同好会から活動を始め、新極真会における新潟県の組織を一から築きあげた。2013年は支部認可から、ちょうど10年を迎える。

取材当日は2013年の鏡開き。新潟県は日本でも屈指の豪雪地帯。当日も雪が降り積もり、道場に来ることすらままならない状況だった。しかしそんな状況にもかかわらず、遠くは上越・妙高地区などから車で二時間以上もかけてやってくる道場生もいた。その反面、道場にこそ顔を出したものの、師範に新年の挨拶のみして家路に

支部長紹介

古川 章 四段

ふるかわ・あきら

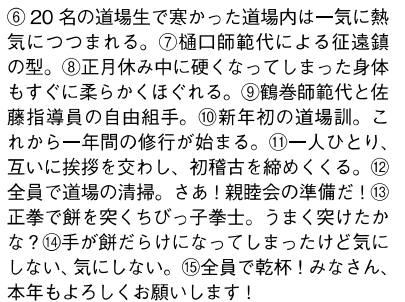
1969年12月7日生まれ、新潟県妙高市出身



3つの特色

- 1 現代のあらゆる年代・世代のニーズに対応したクラス分け
- 2 年代・世代を超えた横のつながり
- 3 極真の伝統を守りつつ温故知新・日々新たな道場

「新極真空手の道場の使命は創始者である大山倍達総裁の意志を未来永劫にしっかり伝えていくことです。そして強くて人にやさしい、社会でリーダーシップのとれる人間を育てることであると思います。また、国際社会において自信を持って生きていくためには、正しい日本の歴史・文化を知らなくてはなりません。文武両道と言いますが、空手以外にも「日本の歴史・文化・武士道精神を伝えられる場所」としての道場にしていきたいです」



⑥ 20名の道場生で寒かった道場内は一気に熱気につつまれる。⑦ 樋口師範代による征遠鎮の型。⑧ 正月休み中に硬くなってしまった身体もすぐに柔らかくほぐれる。⑨ 鶴巻師範代と佐藤指導員の自由組手。⑩ 新年初の道場訓。これから一年間の修行が始まる。⑪ 一人ひとり、互いに挨拶を交わり、初稽古を締めくくる。⑫ 全員で道場の清掃。さあ！親睦会の準備だ！⑬ 正拳で餅を突くちびっ子拳士。うまく突けたかな？⑭ 手が餅だらけになってしまったけど気にしない、気にしない。⑮ 全員で乾杯！みなさん、本年もよろしくお祈りします！

つかねばならない道場生がいたのも事実だ。雪国の厳しさは時として空手の修行をも阻んでしまう。

大雪で遅れた道場生を待って、夜7時半から稽古は始まった。まずは古川支部長から年頭の訓辞。道場生は正座したまま真剣な眼差しで聞き入る。2013年の始まりにふさわしいピンと張り詰めた空気が道場内に漂う。続いてさっそく新年最初の稽古に入る。まずは正拳中段突きの基本稽古から。腹の底から気合いを絞り出すと各人の額には汗が滲みだす。突きと蹴りのメニューを一通り終えると新年の奉納演武に移る。ここでは樋口勝也師範代による征遠鎮の型、鶴巻学師範代と佐藤祐也指導員による自由組手が奉納された。

初稽古が終わり、道場の清掃が終わると親睦会に移る。道場内に臼が持ち込まれ、餅つきが始まる。ちびっ子拳士たちも交代で順番に餅をつく。最初は杵でついてはいたが、ヒートアップしてくると正拳で餅をつく猛者も。乾杯の後は無礼講。つきたての餅を食べながら道場生同士の親睦を深める。道場は深夜になるまで道場生の笑い声と和やかな空気で満ちていた。


指導員 PICK UP!



在籍
指導員


- | | | |
|------------|------------|------|
| 樋口勝也 (師範代) | 鶴巻 学 (師範代) | 佐次美裕 |
| 佐藤祐也 | 遠藤美奈子 | 雑賀悠吏 |
| 品田清文 | 大川和憲 | 皆川 泰 |
| 金子武浩 | 加藤一郎 | 金津雄太 |
| 小林幸弘 | 加藤修一 | 高橋憲広 |
| 菊池誠也 | 安達聖子 | 細野健一 |
| 芸賀英彰 | 森田雅巳 | 若狭利之 |
| 近藤豊仁 | 古川敏廣 | |
| | 藤澤正人 | |
| | 高橋龍矢 | |
| | 諸橋勝弘 | |
| | 市橋正己 | |
| | 山本剛史 | |

上越支部を担当しています。道場生は幼児から還暦を越えた方まで幅広い世代の方が通ってきます。一人ひとり目的は試合であったり健康増進であったりとさまざまですが、上越は場所柄、なかなかクラス分けて指導という形をとることはできません。選手クラスもなかなか育ちにくいので、そのあたりの指導方法には工夫が必要だと思います。



樋口勝也 弐段
ひぐち・かつや
1962年5月7日生まれ
上越市出身

新潟中央道場などを担当しています。古川道場の理念を伝えていくというプレッシャーはありましたが、やりがいもあります。強くなりたいという気持ちは、みなさん同じです。大きな舞台で結果を出すには、決められた時間内でいかに追い込んだ稽古ができるかが重要だと思います。そのあたりを指導していきたいです。



鶴巻 学 弐段
つるまき・まなぶ
1966年9月29日生まれ
新潟市出身

古川道場は文武両道!

新潟県本部道場に入ると正面神棚の下に水墨画が掲げてあるのに気づく。「毘」という文字と龍が描かれたその画をよく見ると「空章」という署名が入っている。なんとこの画は、古川支部長が自ら描いたものだ。「空章」とは古川支部長の雅号(ペンネーム)であり、本名の「章」と空手の「空」、何もないという意味と、もう一つ世界を覆う雄大な「空」を掛け合わせたものとのこと。また古川支部長はこの他にも小堀遠州流という武家茶道もたしなむ。これだけ聞くと「多趣味な師範」と考えがちだが、それらはすべて武の道に通じる。「茶道

とは総合芸術であり、昔の侍は茶道を嗜まないと一流とは認められなかったのです」と語る古川支部長だが、一流の画を飾り(水墨画)、一流の花を飾り(華道)、そして茶で一流のもてなしをすることが茶道であると説く。行く行くは道場の横に茶室も増築し、これらすべてを総合的に教える場を作る構想を立てている。「静と動。ここを日本文化継承の発信基地にしたいと思います」——文武両道を目指す新潟県本部道場が今後どのように変わっていくのか楽しみである。



▲道場の片隅には本格的なドラムのセットが置かれている。古川支部長が叩くそうだが、音楽は「言葉を使わずに伝わる芸術」であるとのこと



▲古川支部長が描いた本格的な水墨画。画の中から龍が飛び出してきそう

MY KARATE LIFE ①

星山恒広

ほしやま・つねひろ
8級
1963年3月7日生まれ
新潟市出身

夢は黒帯と自分の道場 空手で人生が変わった



現在、8級の星山恒広さんが新極真空手に入門したのは友人に誘われたのがきっかけだった。最初は軽い運動をするだけのつもりで、長く続ける気もなかったという。だが稽古を続けていると、体を動かすことによる爽快感があった。いつしか誘った友人は稽古に来る回数が減り、次第に足が遠のいていった。

結局、最後まで残ったのは誘われた星山さんのほうだった。次第に稽古に没頭するようになった星山さんはある時、道場生の応援で試合を見学した。いつも一緒に稽古している仲間が闘っている姿と、それを応援する道場生たちを見た。どちらも一生懸命に闘い、そして一生懸命に応援していた。会場の熱気を直に感じた星山さんは、いつしか「自分も試合場に立ってみたい」と思うようになった。その気持ちは日に日に大きくなり、自ずと稽古にも力が入った。

熱心に稽古を続けた星山さんに、古川支部長から試合に出てみないかと声がかかった。ケガの不安もあったが、勇気を出して試合への参加を了承した。だが試合が決まってからというものの、1カ月くらいの間、ずっと緊張が続いた。だが、いざ試合をやってみると無我夢中でやっていた。新潟県大会の初級の部で3位に入賞。続く北陸交流試合の初級の部では何と優勝を果たした。その勢いで今年の中級の部に挑戦し、優勝を目指したいという。

本業は米の卸売業を営む星山さんだが、空手を始めてから仕事に対する姿勢も変わってきたとのこと。とりわけ部下に対する接し方に変化が出てきた。「以前は何かあると部下を責めていました。それが今はすべて自分の責任であると考えるようになりました」と振り返る。

道場において多様な世代や職業の人と関わることによって、世の中の見え方も変わってきた。また、営業をする上でも集中力が増したともいう。軽い気持ちで始めた空手だが、今では星山さんの人生をも変えつつある。

現在の目標は黒帯を取って自分の道場を持ち、青少年の育成をしたいという星山さん。夢は果てしなく大きい。

MY KARATE LIFE ②

上杉雅夫

うえすぎ・まさお
無級
1951年12月16日生まれ
白根市出身

62歳にして再入門 神の声に導かれた男



若い頃、極真空手を経験したものの、途中で挫折し、壮年になってから再入門を果たす人がいる。若い頃に果たせなかった夢にもう一度挑戦するためだ。新潟県本部道場にも昨年の秋、62歳にして再入門を果たした人がいる。「波動情報研究所」の代表を務める上杉雅夫さんだ。

しかし、上杉さんの場合、他の再入門者とは少々事情が異なる。上杉さんは一度初段を取得しており、全日本大会の出場経験もある。当事、開催されていた「裏日本大会」では優勝も果たしている。北信越地区の強豪として名のある選手だった。

そんな上杉さんだったが、空手の合宿中のある時、突如として精神世界に目覚めた。「空手は外的な力であり、精神世界は内的な力。まったく方向が異なると思ったのです」と上杉さんは語るが、それまでの経歴や実績を一切捨てる、空手からは身を引くことにしたという。そしてそれまで経営していた清掃会社も兄に任せ、精神世界の探求に没頭した。座禅を組み、神の声に導かれて日本中の神社を

巡った。なんと、その数は六千社にも及んだ。

そんな活動を続けていると、理屈では説明がつかないような神秘体験もした。やがて上杉さんに精神世界についての講演の依頼がくるようになった。日本全国で講演を行なうようになり、内的な力はどうぞんみまなびになっていった。その反面、外的な力がなくなっていく、上杉さん曰く「肉体が死んでしまった状態」になった。歩くことすらままならなくなった時、上杉さんは「形としての肉体も小宇宙であり、座禅ばかりでは駄目なのではないか？ 肉体を復活させるにはどうすればいいのかわ？」ということに気付き、再び空手を始めることを思い立った。そしてやるならば「昔やったことがある極真で」と考え、新潟県本部道場へ入門。子供たちに混じって白帯から稽古を始めた。

再入門当初は基本もままならなかったが「ようやく稽古についていけるようになりまし」と語る上杉さん。零体不二（精神と身体は一つであること）の境地に辿り着くのも遠い日ではないだろう。